

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.

273

Mar. 2019

対談

ダイバーシティ社会の聖学院教育



CONTENTS

01 &Talk [ダイバーシティ社会の聖学院教育]

05
focus-ダイバーシティ [聖学院小学校]

06
focus-ダイバーシティ [女子聖学院中学校・高等学校]

07
focus-ダイバーシティ [聖学院中学校・高等学校]

08
focus-ダイバーシティ [聖学院大学]

09
在校生の活躍
卒業生の活躍

11
Seig NEWS

14
Our Mission

15
聖学院歴史探訪

ダイバーシティと聞いてどんなことをイメージしますか？

ドリス グローバルな…属している社会や宗教とか無関係に誰もが参加できる差別のない社会のようなものを想像していました。日本語で調べたときに、人材のことが出てきて、あまりピンときませんでした。

伊藤 検索してみたら、人材活用の話ばかりですね。

八木 語義的には、ダイバーシティとは『違い』を意味し、国籍、ジェンダー、障害を持つ、持たないなどあらゆる『違い』が含まれます。日本では、ダイバーシティという言葉がビジネスにおける女性の活用、という文脈から広まったため、調べると真っ先に人材の話が出てきてしまいます。

そもそもダイバーシティが経営に入ってきたのは、アメリカが一番最初です。黒人に対する差別は社会的不公正であるとされ、ビジネスも公正 (equity) を目指さなければならない、となりました。しかし、ビジネスは儲からなければ続きません。単にクォータ制 (管理職などに女

ダイバーシティ社会の 聖学院教育

教育と多様性

&Ta



伊藤 豊

聖学院中学校・高等学校 国語科、教育統括部長、テニス部顧問。1968年横浜市生まれ。立教大学文学部卒業。カリキュラムポリシープロジェクトメンバーと共に、ポリシーと授業、体験学習を紐づける仕組みを構築中。2010年より「タイ研修旅行」を担当し、事前・事後学習プログラムの作成、引率、レポート集の発行などを行っている。

性・黒人など少数派を一定の割合を定めて積極的に登用する)のよう
に、ある属性の人たちを一定数雇わなきゃいけない、ではなく、多様
性を会社の業績に繋げるよう考えなければならないという段階に至り
ます。例えば、女性の観点から見ることで、男性目線とは異なる商品
の使用法や改良点が出てきます。それを商品開発に取り入れれば、会
社にとってメリットはあるし双方にとっていいことです。ここにきては
じめて人材開発の面でのダイバーシティが出てきます。日本ではそう
した歴史的な変遷はあまり知られていないのかな、と思います。

ダイバーシティの到来をどんな時に感じますか？

八木 聖学院大学でいえば、やはり留学生が増えたことだと思います。
日本人の学生と留学生が違和感なく、混じり合っている状態を見
れば、やっぱりそこには国籍とかのダイバーシティっていうのを感じら
れると思います。

ドリス ケニアには色々な民族がいて、言葉もバラバラです。学校で
は自民族の言葉ではなく、英語とソエリ語2つの言語で話すことにな
っています。文化も全く違う子どもたちが集まって、母国語を使わず
に、2つの言語を使いながらコミュニケーションをとる。それが、ダイ
バーシティのイメージでした。

聖学院大学には、ベトナム人、アメリカ人、マレーシア、ヨーロッパ系
様々な人がいます。ボランティア活動に参加した時、いろんな国の人
たちと、年齢とか性別に関係なく一人の人間として関わり合いながら
活動しました。日本に来てからダイバーシティを感じたのはこういう活
動に参加した時です。

八木 伊藤先生の中学・高校では、ダイバーシティを意識した教育は
されてますか？

伊藤 学校としては様々な取り組みをしていますが、生徒や保護者を見て
いると多様性より「～じゃなきゃいけない」という意識が強い気がしま

1k

今日、様々な場面でダイバーシティという言葉を目にします。
しかし多様性とは具体的にはどういうことなのでしょう？
そして教育はどう貢献できるのでしょうか？
聖学院中学・高等学校と聖学院大学の先生、留学生の3人に
お集まりいただいて話を伺いました。



八木 規子

聖学院大学政治経済学部准教授。津田塾大学
卒業。民間調査研究コンサルティング会社の国
際事業部門に勤務の後、米国カンザス大学より
博士号(Ph.D., Business Administration)を取
得。米インディアナ州バトラー大学助教を経て、
2013年より現職。専門は組織行動論、ダイバーシ
ティ・マネジメント、異文化マネジメント、質的研究
手法。

ドリス・アワンドウ・アウィノ

聖学院大学人間福祉学部こども心理学科3年。
1993年ケニア生まれ。アフリカ最大規模のスラム
街、キベラスラムにあるマゴソスクールに9歳から
21歳までスクールのなかに暮らしながら通う。セ
カンダリースクールを創設し、マゴソスクールで助
手を務めた後、聖学院大学へ留学。

す。例えば自分は、高校3年生の授業を受け持ってます。受験勉強を教えていると、皆同じ道を歩めと言わんばかりに、最低限これだけ覚えなさいみたいなことになってしまう。入学したときはそうでもなかったのに。保護者の皆さんに、実施している外部研修について説明するとすごく関心を持つのです。ということは自分の子に国際経験を積ませたいという焦りもあるんじゃないでしょうかね。語学力や異文化に対応する人間性を育てなきゃいけない。育てなければ、社会から弾かれてしまうといった焦燥感があるのではないかなって思います。

「～でなければならない」という目に見えない呪縛は確かに存在しますね

八木 日本では、こうでなければならないという、均質であることにものすごく縛りがキツイ。伊藤先生が仰っていたように高校3年になっちゃうと、結局偏差値の高い大学に入らなければって、そればかりになりますよね。

伊藤 そう、そこからはみ出すとすごく心細くなっちゃう。もう自分の将来がないと思ってる人がきっとたくさんいます。

僕は、タイの山岳少数民族の子どもたちと聖学院の生徒たちと仲良く一緒にボランティアをするという研修旅行を担当しています。

タイ研修旅行に行くと、自分を開け広げる自己開示というか、自分の気持ちを打ち明けることができるようになります。行く前と行った後では、だいぶ違います。タイに行くと、時間も緩くてちょっと大ざっぱです。ピックアップトラックの荷台にみんな乗って移動したりするような感じです。あの混沌の中に入って、それを通過するとちょっと気持ちがぐだらかになるんだと思います。



八木 山岳民族との異文化体験を積みば積むほど、いわゆる「良い大学」に進むのとは別の進路もありだよねってなりますよね。

伊藤 そうそう、そうですね。

八木 日本の社会ではこの道に行くのが正しい、そこから外れるとすごく大変という認識になっています。ダイバーシティ社会がわたしたちに問いかけてる課題として、複数の他の選択肢も色々ある、そっちに行く勇気を持たなければいけないんじゃないの、ということがあるかなと感じます。

選択肢がない方が楽だという意見はどう思いますか。

八木 価値観が多様化して困るというのは、考えることをサボってるからだと思います。対応するには、「自分はこれは良い、これは間違っていると思う」あるいは「私と関わらなければ、これはあってもいい、そういう人がいてもいい」など一つひとつの様々な価値観について、自分はどのようなスタンスなのか、なぜそのスタンスであるべきだと思うのかを、考えて自分の意見を持たないといけない。それは習慣になっていないと面倒くさいですね。

価値観の多様性を認めるということは、「そのすべてを無条件に平等に扱う」ということとは違います。それぞれの良し悪しについて、一つひとつ考えていかなければいけません。



ドリス ケニアでは、学校に通っている間、両親が子どもを一生懸命サポートします。でも15歳ぐらいまでに自分のやりたいことを決めなさいと言われる。勉強したいことが親の考えと違っていった場合、両親が言う方向に行ってしまうと、あまりうまくいきません。自分の好きなようにやりたいことを選択すればうまくいくと思います。

伊藤 日本人は、空気を読み合っています。その場では、どんな態度がふさわしいか、何がウケるか考えてしまいますが、タイで言葉の通じない人に接すると、空気なんか読めないじゃないですか。向こうの子どもたちはすごく元気で、讃美歌の伴奏がかかると、みんな大声で楽しそうに歌うんですよ。そうすると、うちの学校の子も、徐々にづられて、大きな声で歌うようになるんです。そういう経験ができれば、一皮むけると思います。

ダイバーシティに対応するために教育はどういった貢献ができるのでしょうか？

伊藤 ここで話題にしている多様性は、互いの価値観の共通点を探していくところにあります。家庭や学校といった一つの価値観に閉じ込めてしまうと、そこから外れなくなったり、自分がそこじゃないなと思った時に寂しい。小さな頃から異なる価値観に触れる場面をつくってあげられるような教育が、これからもっと必要になるのかなって思います。

ドリス やはり自分と同じ文化の人だけではなく、他の文化に触れ

て、違う社会を学ぶ姿勢が大事で、そういったことを学ぶことから自分の考え方や生き方も変わると思います。自分も、日本に来るまで知らなかったことや日本で見つけたこと、今まで全く考えなかったことがいっぱいありました。そして精一杯学びました。

ケニアでは、小学校4年生（ケニアでは8年生）の頃から、ディベートでディスカッションして発表する教育のシステムがあります。日本でも子どもたちが自由に意見を言える社会を作らないと、大きくなってからそのことを学ぶのはすごく大変だと思います。だから小学校からディベート、グループディスカッションを取り入れて、大人になってから自分の言葉で意見を言えるような社会を作らないとダメかなと思っています。

八木 仮にダイバーシティ社会を多様な価値観が共存する社会だと定義するならば、それに対して自分はどのようなスタンスを持つのかを考える力を養うのが多分大学教育の一番、肝の部分かと思います。今、大学で我々がアクティブラーニングを推進しているのは、自分で考えるきっかけをつくる教育方法として有用だからです。でもアクティブラーニングに限らず、どんな方法でも良いと思います。伊藤先生みたいにタイに連れてっちゃうっていうのも良いかもしれないですし、ボランティアに連れてっちゃうっていうのもありかもしれません。読書をして今まで読んだことのない本を読めば、違う価値観に触れることになるし、それを通じて考える力を養うというのがダイバーシティ社会における教育の可能性です。

それは、別に全く新しいことではなくて、清水学長の言う「教養を大切にしなければいけない」ことにもつながると思うんですね。教養は幅広いものの考え方に関する学びだから、教養を大切にすることというのは、考える力を大切にすることだと思います。そういう意味で、原点に戻って大学における教養教育をもう一回再発見するところがあるのかなって思います。



伊藤 ネット上の発言とリアルな対面の場の発言とを使い分けなければならないような感じになっていて、それができないとすぐ炎上しますよね。ネットで書かれているコメントに差別的なことやひどいことがたくさん垂れ流されてるじゃないですか。面と向かっては言えないようなことでもネット上だと書き込みますよね。

八木 それは本当に大きな問題だと思います。リアルな人間のことを

好きになったり、尊敬するところから相互理解が始まるのに、オンラインに流れてくる文字情報だけでは発言をしたところしか知りえない。多様な価値観を持っていたとしても、ネット上では「ここは通じ合えるよね」には至りにくいと思います。相互理解のためにはフェイス・トゥ・フェイスのつき合いが重要です。ネットでは一部分だけ切り取って「コイツ嫌い」とか「失礼な奴」となりがちですから。そういう状況から解毒、デトックスするためにも、多様な価値観のある海外とかに連れて行って、人々と交わるのはいいと思います。

伊藤 隣の国と政治的に仲が悪くなったとしても、その国に友達がいたら、そんなに否定しないはずですよ。

八木 そうですね。友達は友達だから。

ドリス そこから世界の平和にも広がると思うんです。友達が他の国にいれば、国自体が悪いイメージでも、友達がいるから安心して遊びに行ける。そこから平和が生まれるというのは、ダイバーシティでも大事なことです。



伊藤 そうですね。そっちに向かって行かないといけないんじゃないですかね。

八木 仰るとおりですね。その意味で、経営学の分野ではダイバーシティから、ダイバーシティ・アンド・インクルージョンという言い方になってきています。多様という意味のダイバーシティは、ディバイド（分ける）という言葉から来ています。それを突き詰めると、欧州の移民排斥や米国社会の分断のように、社会を分けるってことになってきます。そうではなくて、違いは違いとして認めた上で、インクルージョン、包括、包摂性が出てこなければいけない。そこまでいかないと、平和に繋がらない。違いを認めた上で一緒に友達だよね、っていうところになってくれば、平和に繋がっていいと思います。でも、それは言うほど簡単ではない。

ちなみに分けるって過程がないと、みんな同じ人間だ、みんな一緒だって言われちゃったら、ドリスさんや私の独自性が尊重されていないととれます。そういう意味で、違いはやはり認めて欲しい。けど「私たちはただ違うよね」と線を引かれたところで終わってしまったら平和に繋がらない。今は過渡期で、多様性を認めようというステップ。その先にインクルージョンがあるのかな、という感じがします。

focus* (ダイバーシティ)

ダイバーシティにふれる様々な取り組みを紹介します



(上)まずWelcom Partyでお迎えします。緊張気味のスタートですが、すぐに打ち解けることができました。(下)最後はなかよく記念写真です。この後、それぞれの家庭に分かれ、一週間に渡るホームステイプログラムJapan Tripが始まります。

聖学院小学校

Japan Trip



MCSSとの交流の証し

Japan Tripの参加者が決まったときに送ってもらった写真を見ながら、子どもたちはこの日を楽しみにしています。そして、毎年いまだく趣向を凝らせたおみやげもずいぶん多くなりました。その数だけ両校が交流を重ねてきていることを実感します。

驚きから受容へ

今日、多くの小学校で国際交流プログラムが用意されていますが、聖学院小学校では日本から海外の学校で学ぶホームステイに加え、海外から同年代の小学生を受け入れ交流を行っています。"Japan Trip"と名付けているそのプログラムは、例年9月に短期留学生を迎え、ウェルカムパーティーからはじまり、英語、日本語、体育、図工など様々な学びを通して交流を深めます。2018年度はオーストラリア・ブリスベンのMountain Creek State School (MCSS) から12名のお友達を迎えました。

日本では年々在往外国人が増えており、多文化共生に向けて自治体や民間団体が様々な取り組みをしています。聖学院小学校も、子どもたちが生きていくダイバーシティ社会の中で異なる背景や文化を持った方々と、互いに学び合い支え合う関係を築いてほしいという願いを持っています。その意味において、スキルとしての英語教育だけでなく他者への尊敬や思いやりが全ての学びのベースになると考えます。そしてそれは、キリスト教学校である聖学院小学校が大切にしている毎朝の礼拝メッセージで養われています。

2018年度のJapan Tripでは、MCSSの子どもたちに日本文化に触れてもらうため、竹とんぼやお手玉、けん玉、折り紙づくりから交流を始めました。1週間のプログラムを通して、子どもたちは自分と全く異なるお友達を前に最初は驚き、やがて敬意を持ち、そして受容します。とても親切になります。中には、7月のホームステイで仲良くなったお友達と9月のJapan Tripで再会するケースもあります。国を超えた大きな出会いのきっかけになっています。受け入れるための準備は大変な部分もありますが、これからも大切にしていきたいプログラムの一つです。

女子聖学院 中学校・高等学校

国際理解教育



海外からの留学生の受け入れ

昨年はフランス人留学生が1年間に在籍しました。『フランス語サークル』を留学生が自主的に立ち上げ、生徒や教員にフランス語を教えてくれました。1月31日(木)お別れ会が開催されました。

アサーションを身に付け、 コミュニティに貢献できる人を育む

ダイバーシティはお互いが相手を認め合い受け容れる、すなわちダイバーシティ&インクルージョンでなくてはなりません。グローバル社会では、マインドが開かれていることはもちろん大事ですが、それだけでは不足で、相手を尊重したうえでの自己主張や自己表現、つまりアサーションが必要です。女子聖学院ではアサーションを体得し、様々な人たちとのコミュニケーションを通してコミュニティに貢献できる人材を育成する、というビジョンを持っています。

女子聖学院の国際理解教育は大きく海外プログラムと校内国際プログラムとに分けられます。海外プログラムには、セブ島、アメリカ、オーストラリアなど中3から高2を対象とした5種類のプログラムがあります。生徒の多くが海外プログラムを経験しますが、参加した生徒は英語を使う意味を頭ではなく身体で理解して帰ってきます。腹落ちするので、自分事になり、次のアクションへとつながります。参加は強制ではないものの、可能な限りお勧めしたいと、国際教育委員長、滝澤佳代子先生は言います。

英語の表現力を磨くプログラムは中学レシテーションコンテスト、高校スピーチコンテスト、そして中1から高2必修のGlobal 3day Programがあります。中1は入学間もない5月に実施。外国人講師がつく英語漬けの3日間です。中学から英語を学ぶという生徒も少なくない中、はじめは躊躇する生徒もいますが、自分の殻を破る良いキッカケとなります。高校に入るとステージは大きく変わります。最後の高2のプログラムでは、日本の大学院で学ぶ留学生が、ファシリテーターとして5〜6人のグループに1人ずつ加わります。基本的に英語が母国語ではない留学生なので、英語をツールとしてコミュニケーションするということを実践で理解します。



(上)アメリカ・ペンシルバニア ターム留学の様子
(下)高2 Global 3day Program





(上)日本料理を振る舞うためカレーの準備中です。
(下)現地の子どもたちとすっかり仲良くなりました。

聖学院 中学校・高等学校

タイ研修旅行



社会課題レポート集

タイ研修旅行のレポートを本にして、毎年記念祭で販売しています。単なる感想文に終わらない読み応えのある内容。2019年は外部のボランティア活動団体を招いて出版報告会を開催予定です。

相手を「好きになる」ことでジブンゴトにする

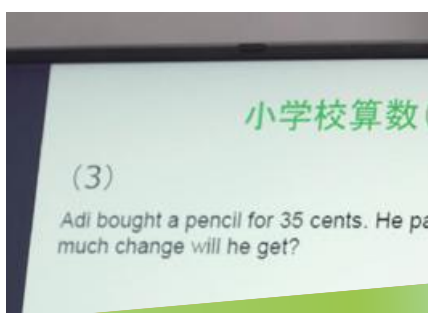
タイ研修旅行は、タイ北部の山岳民族の村で12月の中旬から年末までの13日間を過ごすプログラムです。貧困や家庭崩壊、無国籍など様々な問題を抱え、子どもたちが学校に通うことすらできないことも起きています。日本とは環境や文化の全く違う世界で、生徒たちはコーヒー豆の収穫を手伝ったり、子どもたちと交流したり、ボランティア活動を体験したりします。今年は現地の子どもが描いた絵をシルクスクリーンで印刷をしてTシャツにする企画を実施しました。渡航前に子どもたちから送ってもらった絵を、日本で生徒たちがデザインし版を作ります。それを村に持って行き子どもたちと一緒にTシャツ作りを行いました。Tシャツ作りの他には、カレーライスや串揚げ、茶巾寿司などの料理を作って日本の食文化に触れてもらいました。いずれの企画も大成功で、研修が終わる頃には、生徒たちは言葉や文化の壁を超え、現地の子どもたちとすっかり友達になっていました。

「今年は特に好きになるということを最優先にしました」とタイ研修旅行担当の伊藤豊先生。「社会課題は、中高生にとって遠く感じられます。文化も環境も違う相手の課題を受け入れるには、自分事にする必要があります。そして自分事になるきっかけは「好きになる」ことだと思います。だから旅を通して生徒にはその土地を、現地の人を好きになってもらいたい。それを促すために色々な企画を用意しました。」

確かに「自分事」にしないと他者の問題は身近なものになりません。他者の問題もさることながら、自分との違いや多様性を受け入れるというのは理屈ではなく、「好きになる」「友達になる」というだけで良いのかも知れません。この研修旅行にダイバーシティの本質があります。

聖学院大学

児童学



学習へのアプローチも変わる

小学校2年生の算数ですが、アメリカで出題されると写真のようになります。計算前に英語はもちろん通貨の知識も必要になります。これを考慮にいれないと、どこでつまづいているのか見つからない可能性もあります。

教養がますます問われる児童学

児童学科では、幼稚園教諭一種免許状を取得する学生向けの最終科目で「もしも、クラスに日本語の分からない外国人の子が途中入園することになったら?」という授業を行いました。くじ引きで、国ごとに2〜3人のグループを作り、その国のことを調べた後、自分が幼稚園の担任だったら途中入園してくるその国の子どもをクラスの子どもたちにどう紹介するかを考え、模擬保育をします。設定されている国は、中国、ブラジル、フィリピンなど日本に5歳以下の子どもが多い10カ国です。

近年、日本の幼稚園・保育所・小学校に通う外国につながる子どもは非常に多く、クラスの1/3が外国人というケースもあります。そのため外国人の子どもの途中入園のケースは珍しくありませんし、入園してからその国のことを調べたのでは間に合いません。人数が多い国のことはある程度事前に知っておく必要があります。この演習では体験するだけでなく、入園して来る可能性が高い国の情報をシェアし、知識を蓄えることも目指しています。実際の幼稚園では外国につながる子どもに対する日本人の子どもの反応も様々。肌の色の違いなどを「お顔の色、何色? 違うね」「今なんて言ったの?」と、問いとしてフラットに話しかける子もいれば、距離を取る子もいます。違いに対する距離が拒絶になってしまうこともあります。「入園時に外国の子どもの文化や生活のバックボーンを紹介しておくことが大切です。」と、佐藤千瀬先生。

外国につながる5歳以下の子どもはこれからも増える傾向にあります。この状況に対応するには、最新の教育論にアンテナを張り、文化や言語、経済などの幅広い教養を身に着けることで異文化への理解が深まります。児童学を大学で学ぶ必要性がますます高まるのではないのでしょうか。



(上) 国旗のくじ引きでグループ分けをします。(下) グループでその国について調べて知識を共有。





Y.T

活躍ファイル *No.05

女子聖学院高等学校 1年



深瀬 久博

活躍ファイル *No.06

聖学院大学人間福祉学部2002年卒業
SOMPOケア株式会社 そんぼの家[®] 烏山 ホーム長

誰もが自分の望むことに 挑戦できる社会を作りたい

在校生の活躍

女子聖学院高等学校の英語スピーチコンテストは、30年以上続く女子聖学院を象徴する行事の一つです。参加者は高校生全員で、生徒は春休み中に英語のスピーチ原稿を書いて提出します。その中から優秀な作品が選ばれ、さらに発音や暗誦などの選考が行われ、最終的に各学年3名ずつが7月に行われる決勝大会へ出場します。

「Gender Discrimination」というタイトルで、2018年の英語スピーチコンテストで見事、優勝を果たしたのは、高1生のY.Tさん。ヒラリー・クリントン氏の敗北宣言に感銘を受け、その演説から、「ガラスの天井」の言葉や、小さい女の子たちへのエールを引用して、性別が原因で女性の活躍の幅が狭められてしまう社会を変えていきたいという思いを熱くスピーチしました。現在はニューヨークのオールデン・セントラル・ハイスクールに11ヵ月間の交換留学中で、留学中にはジェンダー平等に関するボランティア活動に参加したいとのこと。ジェンダーや人種など一貫して差別問題に関心を寄せるY.Tさん、将来の目標を英語で語ってくれました。

I want to work at the UN WOMEN and make the society not to be a slave of stereotypes about genders, religions or races but anyone can try whatever they wanted. By drawing on my experiences in the US, I will endeavor to make the society everyone can live happier and more comfortable.

(写真) Y.Tさんはハイスクールでミュージカルクラブの活動に参加しています。

その人にとって何が幸せかを 問い続けています。

卒業生の活躍

福祉の仕事は明確な答えがなく、自分の価値判断がサービス利用者の生活に大きな影響を与えることがあります。「だから確かな知識とその人にとって何が幸せかを考え続けることが大事」これが、サービス付き高齢者向け住宅「そんぼの家[®] 烏山」でホーム長（管理職）を務める深瀬さんの仕事に対する姿勢です。「そんぼの家[®] 烏山」は入居者の自立を重視し、在宅から施設入居、利用できるサービスも所得や必要性に応じて、フルラインナップでカスタムメイドできる会社に属した施設です。その理念が深瀬さんのスタンスに合っていて3年前から務めることになりました。

深瀬さんはかつての職場で、ヘルパーの悩み事に管理者が対応しきれていないのを見て、もっといい環境を作るため管理者になろうと思ったそうです。そういう思いがあるため管理者となった今、ヘルパーの方たちとのコミュニケーションを非常に大切にしています。「ヘルパーや入居者が困っていたら絶対に諦めないで取り組みます」深瀬さんの向き合い方が徐々に受け入れられていくと、これまで以上にミーティングで発言しやすい雰囲気生まれ、自分たちで答えを出し合うようになりました。

深瀬さんは聖学院大学のピア・スーパービジョンの代表も務めています。自分の価値基準を拠り所に判断する仕事だからこそ福祉の仕事は孤独で迷ったり苦しんだりします。「サービス利用者のニーズを正しく理解するためには自分の考え方に不足や偏りがないかを確認しあえる仲間が必要。それがピア・スーパービジョンです。」そこには手を差し伸べる側の人も救いたいという思いがあります。「ソーシャルワーカーに限らず、ヘルパーも含めもっと多くの人に参加してほしい。」この取り組みを広げることも深瀬さんの目標の一つです。

まだまだあります！

Seig NEWS

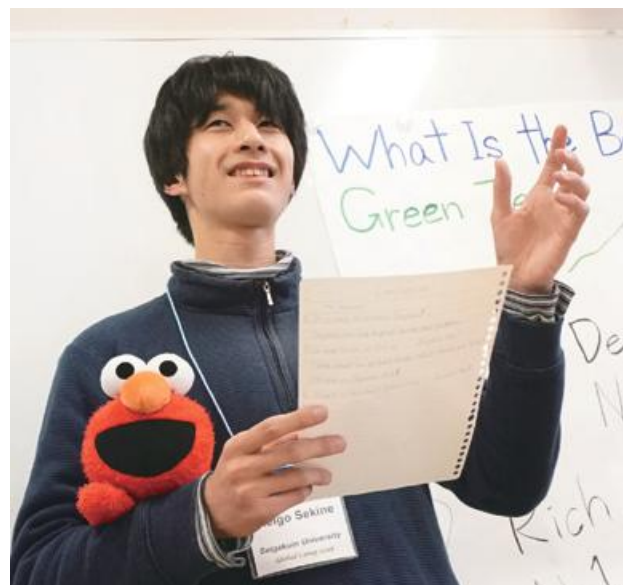
学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学



主体的に楽しく英語を学ぶ疑似留学体験 グローバルキャンプを開催しました

聖学院大学は2月12日(火)から16日(土)までの5日間、今年で第3回目となる「グローバルキャンプ」を実施しました。グローバルキャンプは英会話イオンとの産学連携で行われており、理論と実践に基づいた本格的な英語学習プログラムです。プログラムにはアクティブ・ラーニングが取り入れられていて、オールイングリッシュの講義を受け、異文化に触れるアクティビティを行いました。グループごとに、最終日に行われる英語のプレゼンテーションの準備を初日から開始。英語漬けの日々は想像以上にハードですが、その甲斐があって、どのグループも素晴らしいプレゼンテーションを行うことができました。プログラム参加者は聖学院大学生14名、他大学生2名、高校生5名、一般4名、合計25名。



聖学院大学



「未来をひらく～3.11から～」を開催

2月16日(土)に埼玉県防災学習センター主催および会場、「未来をひらく～3.11から～」実行委員会・聖学院大学ボランティア活動支援センター共催のボランティアサミット「未来をひらく～3.11から～」を開催しました。震災を語る「あの日を語ろう、未来を語ろう」という企画を各地で展開する佐藤敏郎さんと、震災から奇跡的に生還した只野哲也さんの講演会などのプログラムが行われました。イベントの開催に向けて、実行委員会の学生たちがテレビ局や県庁の記者クラブを訪問し記者発表を行いました。当日は10大学2高校の学生、生徒約50名と約70名の一般の方々が参加されました。



聖学院大学大学院



アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科に 千葉眞先生が着任

政治思想史、政治理論、平和研究、キリスト教神学などを専門とされる千葉眞先生が2019年4月にアメリカ・ヨーロッパ文化学研究科の客員教授として着任されます。千葉先生は現在は国際基督教大学教養学部の特任教授で、「アーレントと現代—自由の政治とその展望」(岩波書店、1996年)「連邦主義とコスモポリタニズム—思想・運動・制度構想」(風行社2014年)など著書多数。アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科では「アメリカ文化学研究A」、「アメリカ文化学A演習」他の科目を担当されます。



※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。

※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」



聖学院中学校・高等学校



QUEST CUP2019全国大会に出場

2月16日(土)、立教大学を会場として、クエストカップ実行委員会および教育と探求社主催の「QUEST CUP2019」の全国大会が開催され、聖学院中学校からは「コーポレートアクセス」部門に予選を勝ち抜いた2チームが出場を果たしました。Panasonicのミッションにチーム「無差別」、良品計画のミッションにはチーム「MUJIタウン」が、それぞれ素晴らしいプレゼンテーションを披露してくれました。各企業別に全国から予選を勝ち抜いてきた10チームずつでプレゼンを競いました。残念ながら企業賞の受賞とはなりませんでした。プログラムを通して深い学びを得る機会となりました。



聖学院中学校・高等学校



「できたこと手帳」と コラボした生徒手帳

聖学院中高は2019年度より全生徒に配付される生徒手帳に永谷研一氏(発明家、株式会社ネットマン代表)が考案した「できたことノート」&「できたこと手帳」のメソッドを導入します。自尊感情を育み、自己肯定感を高める「できたこと手帳」を公式の生徒手帳にカスタマイズして活用する取り組みは全国初。思考力や語彙力アップによる学力の向上や感情のマネジメントなど様々な教育効果を期待しています。

女子聖学院中学校・高等学校



高校演劇部が 三校PTA合同講演会で公演

2月16日(土)、第8回三校PTA合同講演会(女子聖学院中学高等学校、聖学院中学高等学校、聖学院小学校)が開かれ、女子聖学院高校演劇部が公演を行いました。演目タイトルは『麻布十番テラー遠藤』。国語科 筑田周一教諭による脚本で、元女子聖学院教諭 遠藤富寿先生(聖書科)の戦争体験を元にしたストーリー。戦争に翻弄されながらも必死に生きた人々のリアルを感じる演劇でした。この公演を通して、戦争という悲しい過去を振り返り、平和な世を築いてきた先代への感謝を忘れないことを心に誓いました。



女子聖学院中学校・高等学校



貿易ゲームワークショップを実施 ～世界の格差をなくすためには～

1月23日(水)、NPO法人「未来をつかむスタディーズ(通称:みらスタ)」の方を招き、中学2年生を対象に『貿易ゲーム2030』を実施しました。このゲームで自由貿易システムを理解し、不平等な条件の下で行われる国間の経済格差を学ぶことができます。ゲームを通して、現実社会に存在する先進国と途上国との生産性の差、経済格差などといった世界の現状を改めて知ることができました。このワークショップを通して中2生たちは、「SDGs」がこのような様々な国際問題を背景に掲げられた目標だと理解することができました。SDGsとともににより良い世界を望み、未来を考えられる人となることに期待しています。



聖学院小学校



2018年度 学習発表会

3月2日(土)、1年生から6年生までの学習発表会が行われました。1年間の成長を、授業で学習してきたことの発表を通して保護者の皆さんに見ていただきました。5年生はグループで一つの国について調べて、調べたことを英語で発表しました。6年生は長崎への修学旅行を通して学んだ原爆やキリシタンのことなどをスライドと寸劇を使ってみんなで発表しました。学習発表会の後はチャペルにて5年生、6年生、ハンドベルクラブのハンドベルのコンサートが行われました。



聖学院幼稚園



笑顔いっぱいの保育参観

2月20日(水)・22日(金)に保育参観を行いました。毎年2月に学年ごとに分かれて、劇遊びや歌・合奏を保護者の方に披露します。当日は、ドキドキしながらも役になりきって表現したり、この1年の成長を色々なかたちで見ていただくことができました。きっとお家では、お父さんやお母さんがたくさん子どもたちを褒めてくださったことでしょう。

聖学院みどり幼稚園



40周年記念音楽会

2月22日(金)、創立40周年を記念して、チェロ演奏者のポーマン・ベアンテ氏をお招きし、音楽会を行いました。初めてチェロを見る園児も多く、演奏前から楽器に興味津々。讃美歌や日本の歌曲「さくらさくら」などを演奏されました。また、チェロの構造や歴史などにも触れ、最後は「まもり」と園歌を演奏され、園児たちも一緒に歌いました。後半は保護者向けの演奏会となり、充実した音楽会となりました。



聖学院みどり幼稚園



40周年記念講演会

2月25日(月)、玉川大学教授の大豆生田啓友氏から「いまだきの子育て、幼児期に大切なこと」と題してご講演をいただきました。ご自身も三人のお子さんの父親として育児に関わる中で、幼稚園教諭から子育て支援を行うようになります。現代、特に母親が抱える育児の大変さと、幼児期の「遊び」を中心とした保育の重要性を解説。「自分だけがうまくいっていないのではないか」という悩みを抱えやすい子育て世代にとって、励ましと学びに満ちた時となりました。



Our Mission

聖学院留学生センター ―事務室― (大学キャンパス)



留学生には学生生活を送る上で単位のことから落とし物の問い合わせまで様々なレベルでわからないことがいっぱいあります。もともと授業のことは教務課、学生生活は学生課と、各担当部署で留学生の相談を聞いていたのですが、留学生の数が増えたことにより(2019年1月現在は376名)学生支援を一元化する目的で、2017年9月に留学生センターができました。

留学生センターでの主な相談内容は奨学金、授業料減免制度、ビザの更新、就職相談などです。ヴェリタス祭や地域のお祭りなどへのイベント参加を企画することも、留学生センターの仕事です。あるイベントで、参加予定の留学生が、準備段階のミーティングにはほとんど集まらず、大丈夫だろうかと不安だったことがあります。でもふたを開けてみたら当日はほぼ全員が参加し団結して自発的にイベントを運営していました。またその時の売上を、彼らは自分たちで話し合って経済的な困難を抱えている人たちに寄付することにしました。自主性と奉仕の精神がちゃんと育てられていることを知り感動しました。こうした成長に触れると仕事のやり甲斐を感じます。

留学生はいい加減で自己主張が強いと思われがちです。確かに時間や締め切りに対して厳しくない文化の国の人もいますが、他人のことも考えていますし、熱意も優しさもあります。文化や習慣が日本人と少し違うだけで同じ学生です。

今後は、日本人の学生が留学生を仲間として支援するピアサポートの体制を整えたいと考えています。また、わからないことがあった時に「留学生センターに行けば解決できる」と思ってもらえる部署でありたいと思って日々取り組んでいます。

Our Mission

1. 安心を与える
2. 地域や学生との交流を支える
3. 愛校心を育てる



●STAFF

寺嶋健一・サベット由里子・
西八條平和・瓦井有香

●オフィス

大学1号館 1F

聖学院歴史探訪

#4 聖学院を つくった人々 -石川角次郎-



聖学院中学校の初代校長となった石川角次郎先生は、1867年（慶応3年）栃木県足利市に生まれ、15歳のとき上京、私立共立学校（後の開成中学）に入学しました。そして、翌年には洗礼を受けクリスチャンとなります。その後、東京大学予備学校に進みますが、東京大学には進学せず、アメリカのサンフランシスコにあるユニバーシティ・カレッジに留学しました。そして、1891年に帰国し、学習院の教授となります。

しかし、ちょうどその頃、石川先生はガイ博士と出会い、神学校と中学校の設立に協力することを熱心に求められ、ついにそれを受諾しました。そして、1903年に聖学院神学校が、翌年には聖学院英語夜学校が開設され、その初代校長に就任します。それは9月11日のことで、その時の入学者は17名でした。石川先生は、第七回卒業式（大正5年）の式辞の中で、自らの教育精神について次のように語っています。

「故に諸君の価値は『何を為したか』ではなく『如何に為したか』で定まるのである。仕事の種類ではなく、其の仕事に対する態度が肝要なのである。『何を』は自分で勝手に選ぶ訳にはいかぬけれど、『如何に』は自分の態度だから勝手に定められる。ここに真の自由があり、真の独立自守がある。」

出典：聖学院・女子聖学院中学校高等学校 聖書教科書編集委員会編『神を仰ぎ人に仕うー召命に生きた人々ー』改訂版、聖学院大学出版会、2014年（出典より一部変更）

学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博

〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科 ・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 児童学科 ・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究科／アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科／人間福祉学研究科
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／山川 秀人 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／角田 秀明 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／山口 博 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／佐藤 慎 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig-asf.jp/fund/>



住所変更・お問い合わせは下記までお願いします。

学校法人聖学院ASF事務局 Tel 03-3917-8352